

# ある刀工の足跡を追って ―有栖川宮に仕えた刀工・桜井正次と関西―

内藤 直子

**要旨** 明治二十一年（一八八八）から大正六年（一九一七）の間、神戸市西部の景勝地・舞子の地に有栖川宮熾仁親王・威仁親王の別邸があった。しかし、威仁親王が同地で刀工を抱え、別邸敷地内に鍛錬場を設けていたことは殆ど知られていない。本稿では、有栖川宮熾仁親王に抱えられた刀工・桜井正次が関西を拠点としていた約十年間の動向に着目し、同地に建てられた鍛錬場「如神庵」での事蹟と、その後同庵が移転した京都・八幡市の圓福寺での事蹟について紹介する。また、正次の子・正幸が京都・立命館大学の日本刀鍛錬所に奉職していたことも踏まえ、明治から昭和戦前期における刀剣製作者の置かれた状況を展望する。

## はじめに

平成二十六年、現代刀の特別展を開催するに先立ち、刀剣に関する簡単な講座を実施することになった。現代生活においてはほとんど忘れ去られてしまっているが、関西には刀剣製作ゆかりの地がいくつもある。そういう土地を網羅的に紹介する講座にしよう、と思い、なるべく意外性のある場所をいくつかピックアップした。中でも、刀剣ファンですらあまり知らないであろう意外性の高い場所として、昭和戦前期に京都衣笠の地にあった立命館大学の日本刀鍛錬所と、神戸舞子の地にあった有栖川宮別邸内の

鍛錬所について、大きく時間を割いて取り上げようと思い、調べはじめた。この二箇所はあまり深く考えずにピックアップしたのだが、偶然なのか必然なのか―おそらく必然ではないかと思うが―立命館大学の鍛錬所を率いた桜井正幸の父は、ほかでもない、舞子の有栖川宮別邸内鍛錬所に仕えた桜井正次であった。その後、調査の過程でさまざまな縁に導かれるうち、講座の準備を越えてこのテーマに興味を抱くようになった。なぜならば、桜井父子は、当時の評価とは正反対なことに、現在ほとんど顧みられることがなく、正幸に至っては没年すら知られていない。しかし、正次を知るほどに、その

製作に対する誠実な姿勢と、その支援に心を寄せる有栖川宮家の威仁親王の行動には、深い感銘と共感を覚える。本稿ではそうした彼らの歩みを、関西での動向を中心に振り返る。

### 有栖川宮家の舞子別邸

有栖川宮舞子別邸の跡地には現在、「シーサイドホテル舞子ビラ神戸」が建つ。このホテルはJR舞子駅から徒歩数分の高台にあり、瀬戸内海が一望できて美しい。敷地内には、ここが有栖川宮別邸であったことを示す石碑等はなく、ガーデンテラスに見える姫小松のみが、当時からの景色をわずかに留めている（写真1）。

この地はもともと東京電燈初代社長の矢嶋作郎の邸宅であった。それを明治二十一年（一八八八）八月、有栖川熾仁親王が、接待役であった神戸の実業家・武岡豊太の案内でこの地に立ち寄った際、その眺望に大変心を惹かれ、交渉を重ねて購入に至った。建築への造詣も深かった親王は明治二十六年には改築にも着手し、明治二十八年の薨去までの間、盆正月の時期に避暑避寒にたびたび訪れるほどこの地を好んだ<sup>①</sup>。

第九代熾仁親王の没後第十代となった威仁親王もまたこの地を愛し、折に触れ静養に訪れた。このように有栖川宮の熾仁親王・威仁親王双方から愛された舞子別邸は皮肉にも、両親王の薨去の地ともなった。そして大正二年（一九一三）の威仁親王の薨去後の大正六年（一九一七）七月、住友吉左右衛門に譲渡され、宮家の手を離れることになる<sup>②</sup>。

明治二十一年に購入してから三十年足らずではあったが、風光明媚なこの地を二人の親王はこよなく愛していた。しかし、この地に威仁親王がひ



写真1) シーサイドホテル舞子ビラ神戸 ガーデンテラス風景

とりの刀工を招いていたことは知られていない。

### 如神殿と桜井正次

刀工・桜井正次（一八六八～一九五〇）は田中正竜斎正久の子で、江戸の生まれである。長じて桜井家を嗣ぎ、桜井姓になった。鍛刀は固山一門の寛次に学んだと伝える。明治二十八年（一八九五）、岡倉天心が東京美術学校に鍛金科を設置するに際して、当初講師候補としていた、大阪の板尾

新次郎に断られたことを受け、正次は平田宗幸とともに属託の講師として迎えられた<sup>③</sup>。ただ、明治二十五年紀で「於東京美術学校」銘のある正次の直刀が現存（東京国立博物館所蔵）していることからみて、それ以前に天心は正次の存在に注目していたようである。いずれにせよ、廃刀令後に経済的基盤を失いつつあった刀工にとって東京美術学校という職場はまたとない活躍のチャンスであった。しかし、そのわずか数年後、排斥運動に巻き込まれた天心とともに正次は辞職し、学校教育の場で日本刀の鍛錬実技を指導するという気運も、これとともに潰えてしまう。

美術学校退職後、舞子へ行くまでの正次の動向については、今後詳細な調査を要するが、鎌倉の瑞泉寺の鍛錬所にて鍛刀活動を行っていたことは確かである<sup>④</sup>。正次は銘に「正」を切るため「正正次」（マンジマサツグ）と呼ばれ、仏教の信心が強い人物であると言われている。正銘を切るようになった時期は不明であるが、先述の明治二十五年の直刀製作の時点においてすでに正銘を切っており、かなり初期からこの銘を用いていたようである。

美術学校の職を辞し、経済的には決して十分ではなかったであろう正次に次の転機が訪れたのは明治四十二年（一九〇九）十月のことである。舞子で療養中の威仁親王が正次を招いてくれたのである。親王は、正次の希望通りの間取りの鍛錬所も新築し、与えた。明治四十二年十二月十四日に道場開き、十六日に打ち初め式が挙行されている<sup>⑤</sup>。翌明治四十三年（一九一〇）七月、親王はこの道場に如神殿という号を与え、自筆の扁額（写真2）を掲げた。さらに親王は別邸内に正次を住ませた。二十坪ほどのその住まいは、のちに親王から「臥龍庵」と名付けられた<sup>⑥</sup>。これについては後述する。

如神殿の扁額は縦五三cm×横一三五cmであり、以下の文字が刻されている。なお「欽堂」は威仁親王の号である。

如  
神  
殿

明治四十三年夏日

為舞子別邸内

鍛工場扁額書以

欲為記念

欽堂 「威仁親王」 「欽堂翰墨」

舞子の如神殿で製作された刀のうち明治四十五年五月には三口が天皇に献上された。またときには親王自らが鉄槌を手にし、鍛錬を行い、渾身の作には稠宮の稠の字を取り、「稠助」と銘刻することもあった<sup>⑦</sup>。

書画にも長じていた威仁親王であるが、晩年は特に鍛刀に心を砕いていたともいう。その親王との関係について、正次は後年、こう語っている。

刀剣は、武士の魂であるから、鍛刀の技術を百代の末までも伝えねばならぬという親王の御考で、私の如き未熟な者を御近づけに成ったので御座ります。されば、刀を打つ処を御覧に成るばかりでなく、時をり、御自身で、槌を御執りに成って鍛えられたこともありました。私が東京などへ旅行する時など、余暇が有ったなら、方々へ参って、所蔵の刀剣を見せて貰



写真2) 如神殿看板 圓福寺所蔵

い、参考の為にいちいち書き留めて置き、又帰った上で話して聞かせよと、  
 毎々御沙汰がありました。『威仁親王行実』による。旧字・仮名遣いのみ  
 改めた)

威仁親王は日本刀の歴史や刀工の立場を深く思い、その神髓を理解し、  
 活動に心を寄せていた。正次にとっては代え難い理解者であり支援者であ



写真3) 臥龍庵外観

ったはずである。その親王を大正二年に喪った正次の悲嘆は察するに余り  
 ある。癒えることのない追慕の思いから、正次は追悼のための庵の建立を  
 企図したようだ。しかし正次に思いを実現するための資金力は無く、思い  
 だけ抱えて数年が過ぎる。そんな正次の思いを汲み、叶えたのは、親王と  
 も正次ともゆかりのあつた見性宗般である。宗般は大徳寺の管長であり、  
 京都八幡の圓福寺の住職でもあつた。そんな宗般の指南のもと、大阪や尼  
 崎で海運業により巨万の富を築いていた尼崎伊三郎らによる浄財を得、大  
 正六年一月に威仁親王を偲ぶ施設が圓福寺内に起工され<sup>⑧</sup>、(写真3)大  
 正七年十二月に完成した<sup>⑨</sup>。この建物は今も同寺内に現存する(非公開)。  
 正次はこの建物に対し、かつて威仁親王が正次の住居に名付け掲げてくれ



写真4) 臥龍庵看板 圓福寺所蔵



写真5) 雲龍図壁画 田中良雄画

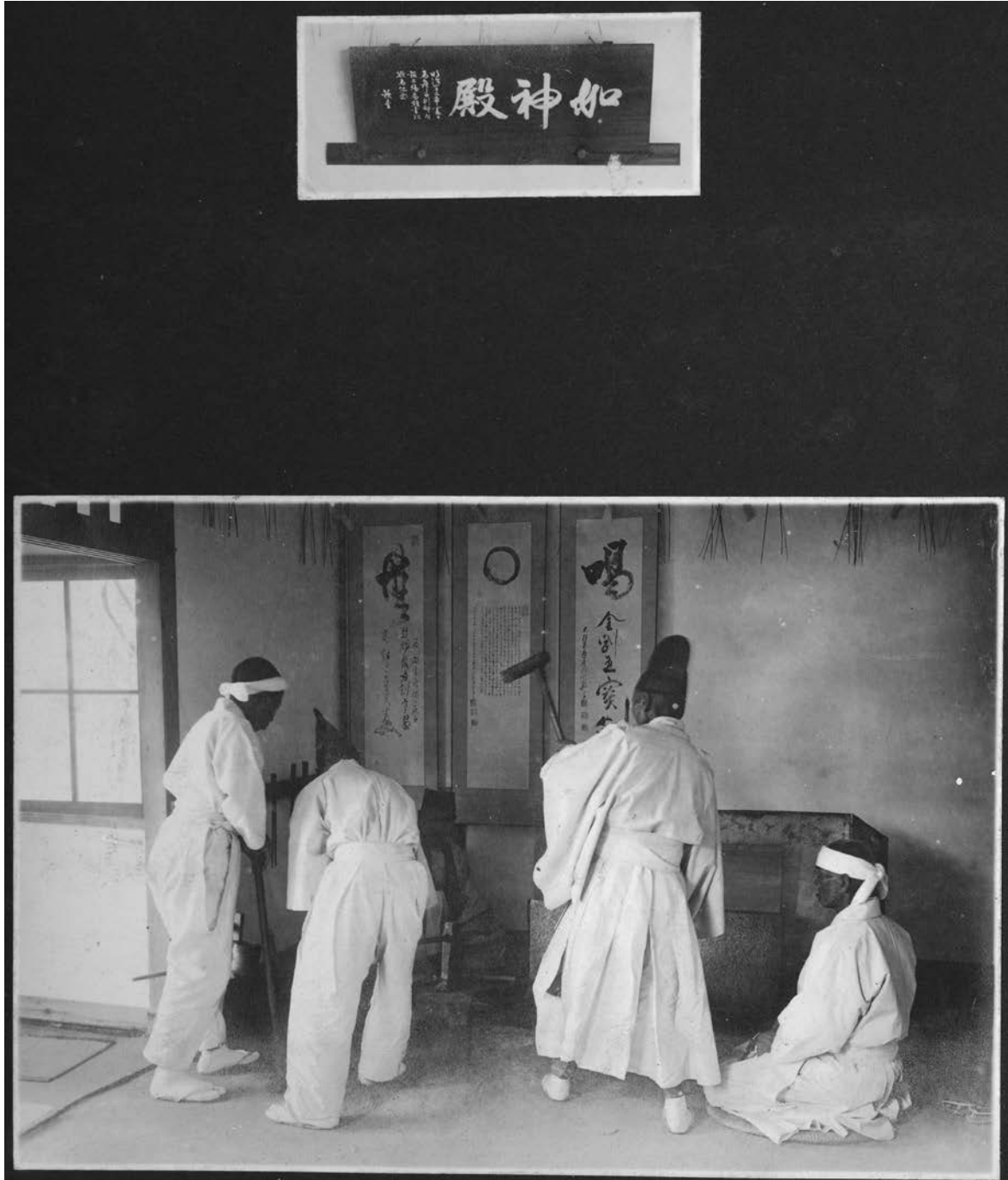


写真6) 如神殿内風景写真 圓福寺所蔵

た「臥龍庵」の扁額を掲げ(写真4)、その遺徳を偲んだ。楼閣の最上階には山崎朝雲作の親王・親王妃像と、田中良雄(正次の弟)作の宗般寿像、壁には田中百嶺(正次末弟)筆の龍の絵をめぐらせた<sup>(10)</sup>。敬愛する親王と親王妃は当代随一の彫刻家に依頼し、それ以外は費用面で無理の利く親族に依頼したのであろう。正次の心尽くしの荘厳だったことが看取される。(写真5)

なお、同寺にはその後昭和三年に、有栖川宮の東京・三年町本邸御座所「伏虎窟」も移築されている。

追悼施設としての臥龍庵の建設が軌道に乗ると同時に、宗般は正次のために、舞子の鍛錬所である如神殿も下付してもらうよう骨を折った。そして宗般の取次の甲斐あり、大正六年四月、正次にとって思い出深い鍛錬所の移転は実現し、しかも舞子から京都・圓福寺への移築のための費用を添えて引き渡された。なお、舞子の別邸が住友家に譲渡されたのはその三ヶ月後の七月のことであり、譲渡までに間に合うように、移築作業は遂行された。

鍛錬所は現存しないが、圓福寺の境内中、木々に囲まれた小高い場所にあったものと推察されている。現在も現地は静かな環境の中にあつてさらにひとときわ静寂な空間であり、当時においても製作に専念できる清浄な空間であつたことが忍ばれる。幸い古写真が残されており、その建物の内部・外観を知ることができる(写真6、7)。

建築的には、屋根が宝珠を伴う宝形造の典型である点が、鍛錬所としては珍しい<sup>(11)</sup>。これが舞子時代からなのか、圓福寺移築時に改築があつたのかは不明であるが、諸書を見る限り圓福寺移築に際しての改築の記載はな



写真7) 如神殿写真 圓福寺所蔵

く、また、移築の目的から考えても改築の必要性はないこと、そして、正次自身が卍を名乗るほど仏教の信心が篤かったことを考えると、当初からであったと考えるのが自然かもしれない。現代刀工の一般的な鍛錬所も炉の上は天井高を高くしているが、この建物も開口部入って正面、天井高の高いところに炉を配置していたようである。

### 鍛錬所設置の背景

威仁親王は正次以外の刀工にも心を砕いていたとも伝えるが、住まいを与え、『威仁親王行実』に名前が出てくる刀工は正次だけである。威仁親王は数ある刀工の中でなぜ桜井正次を抜擢したのか。その理由を伺える資料がある。

(前略)直胤の門に堀井胤吉あり、他に月山貞一・宮本包則・桜井正次刀銘は正次等、その翹楚と称せらる、貞一・包則は、夙に帝室技芸員たりしが、独り正次は、此輩と実力相敵するに拘らず、声誉、一籌を輸し、遂に不遇の嘆あるを免れず。わが鍛刀史の最終の頁を飾るべき(以下略)

(※『威仁親王行実』より。 仮名遣いは改めた)

堀井胤吉(一八二一〜一九〇三)は大坂の刀工・月山貞吉(一七九九〜一八七〇)と江戸の刀工・大慶直胤(一七七九〜一八五七)に師事した滋賀石山の刀工。この月山貞吉の後継者である月山貞一(一八三六〜一九一八)と、備前長船系統の宮本包則(一八三〇〜一九二六)の二人は、明治三十九年に刀工として初の帝室技芸員に任命されている。明治維新による

社会構造の変化に加え、明治九年の廃刀令が打撃となって、それまで数多くの需要に支えられていた刀工たちが廃業や転業を余儀なくされている中、月山貞一・宮本包則両氏については、帝室技芸員の拜命により鍛刀活動の環境が保たれていると親王は考えたようである。また堀井胤吉は宮内省式部次長三宮義胤に重用され、明治二十八年には三宮家邸内に新築の鍛錬所も建ててもらうなど、宮内省御用刀匠として鍛刀に専念できる環境であったため<sup>⑩</sup>、名人レベルの刀工の中で、ひとり桜井正次だけが不遇である、と考えたわけであろう。威仁親王が如何に当時の刀工の置かれた環境に精通し、心を寄せていたかということが伺い知れる。どうしてここまでこの支援を親王は正次に与えたのか。もちろん純粹に正次を思う気持ちがあったことは間違いないが、これには廃刀令後明治末年までの刀剣界をめぐる動向も影響を与えていると思われるのである。

### 明治年間の刀剣界

明治九年の廃刀令後、同二十七年の日清戦争(明治二十七年)までの間、刀剣製作者は激減し、業界は衰退を極める。その間においては、明治十九年の伊勢神宮御料製作やその後の正倉院宝剣の模造等、時々においてわずかながら公的な用途があったに過ぎず、苦難の時代であった<sup>⑪</sup>。そんな中、刀剣保存のための会が多数興るきっかけともなった刀剣会(のちの中央刀剣会)が発足したのは明治三十三年のことである。

先述の刀工・堀井家は現在も刀剣制作を続けている。その一族の著作「えにし」には、刀剣会発足と同じ明治三十三年八月に堀井胤吉が記した「日本刀鍛錬法存置之意見書」が所載されている。同意見書は、古来からの

名工の隆盛を語り、そんな刀工が明治三十三年時点においては、十人程度しか残っておらず、このままでは鍛刀の方法が絶えてしまうため、国としてこの継続を支援して欲しい、と訴えるものであった。そしてその三年後に死去した胤吉に代わりこの意思を継いだ正次は明治三十六年、同じ標題の意見書を書き残すが、それは胤吉の意見書よりさらに踏み込んだ内容となる。

冒頭に古来の輝かしい名刀史を語る書き出しは胤吉の意見書と同じだが、正次はその後こう訴える。現在欧米人が日本刀を高く評価しているにも関わらず、技術が衰退の途をたどり、一方で名刀が海外に流出していることは嘆かわしい。この国の刀剣は、古来「護国安民の要具」であり、我が国固有の鍛錬技術を絶やしてはならない、と。胤吉の意見書よりもより具体的に当時の実情と危機感を明示した内容である。なおこの意見書は、正次と、堀井胤吉の後継者「堀井胤明」との連名で記されている<sup>14)</sup>。

これらの資料がいずれも、廃刀令からちよどひと世代が経った明治三十年代に記されていることには重要な意味がある。刀剣が身近であった最後の世代が晩年へとさしかかり、刀剣界に明るい識者の間では刀剣技術の断絶が問題視されはじめていたのだ。明治三十三年における刀剣会設立や、明治三十九年の刀工初の帝室技芸員任命が、刀剣技術断絶の窮地を救ったことはもちろん、最後のタイミングにおいて、さまざまな人がそれぞれの出来る範囲、出来る形で刀剣製作技術を護ろうとしたことよって、かろうじて刀剣製作の技術が継承されてきた。そして、この時期に事態を察し手をさしのべたひとりがある。有栖川宮だったのではなからうか。もしこの時、誰かひとりでも行動に移すのが遅ければ、現在の現代刀製作の隆盛はなかつただろう。

正次が圓福寺に移築した鍛錬所「如神殿」でいつまで鍛刀活動をしたのかは詳らかではない。ただ、同寺に於いて大正九年(一九二〇)、大阪日日新聞の主催により正次の焼刃会が行われている<sup>15)</sup>。これが、京都・圓福寺時代の正次について現在確認できる最後の事蹟である。

### むすび — 桜井一門と関西 —

以上、正次が関西にいた、神戸・舞子時代から京都・圓福寺時代までの十年ばかりの軌跡を追った。この前後を含め、正次は、鎌倉、沼津、福岡、東京等居所を代えていたようである<sup>16)</sup>。その詳細な年次と事蹟を明らかにするのは今後の課題であるが、最後に、正次の後継者・桜井正幸らの関西での動向を紹介し、本稿のむすびに代えたい。

桜井正幸は、昭和戦前期が主たる活躍期であったこともあり、その動向については正次以上に不明な点が多い。明らかであるのは、昭和十四年に設置された立命館日本刀鍛錬所に所長として就任しているということである。

大学に設置された本格的な日本刀鍛錬所であったこの組織の成り立ちについては『立命館百年史紀要』第五号にある西岡成幸「立命館日本刀鍛錬所の記録」に詳しい。これによれば、同鍛錬所の設置を推進していた中川小十郎は、昭和十三年の時点で立命館大学内に鍛錬所を設置する構想を持ち、その中心人物に「有栖川宮家お抱え鍛冶であった正次の後裔」たる桜井正幸を据えることを念頭に置いていたようだ。背景は多々あるが、その主眼は古式鍛錬法の継承にあったとみてよい。中川と桜井父子との間に親交があったのか否かは不明だが、明治末年から意識されはじめた、

「古式鍛錬法を絶やしてはいけない」という識者の潮流を汲んだ動きであったことは明らかである。同論考によると、日本刀鍛錬所は、設置から三年後の昭和十七年六月、放火による火災に見舞われるが、大学は火災の直後から再建に向け始動し、終戦頃までは存在していたようである。ただ、戦時下の混乱もあり、正幸の退職時期を含め、最後の状況は詳らかではない。

東京美術学校での日本刀鍛錬教育というまたとない機会を心ならずも失うこととなった正次にとって、正幸による立命館大学での実技指導は、当時の思いを遂げる機会と受け止められていたに違いない。しかし西岡氏が言及するように、戦禍の拡大とともに、同大鍛錬所の設置目的が変節を遂げたことも否定できない事実である。放火の一件も含め、当時の現場でしか分からない事情があったのだろう。

正次の事蹟を追う過程で見取れたように、明治二十年代後半に岡倉天心が正次を東京美術学校へ招き、明治三十三年にはのちの中央刀剣会が設立され、明治三十九年には月山貞一、宮本包則の二名が刀工初の帝室技芸員となり、大正初期にかけて舞子・八幡の如神庵で正次が作刀した。その後、昭和になると、東京方面では栗原彦三郎の尽力による日本刀鍛錬習所の開所や大日本刀匠協会の発足といった動向も認められる。これらはずべて、断続的にかつ、局地的に続いてきた日本刀鍛錬技術の保存運動であるといえる。この気運の中に、立命館大学の日本刀鍛錬所もまた位置づけられるべきものであるのだ。

\* \* \*

大阪・堺にある水野家は、正次の系譜にあつて現在も刃物鍛冶を生業とする数少ない一家である。同家の話によると、水野正範（明治三十五（一九〇二）生まれ）は立命館日本刀鍛錬所で正幸に鍛冶を習い、圓福寺には如神殿において森田正道と合作刀を制作したことをうかがわせる漢詩が残る<sup>①</sup>。その子水野貞昭（昭和六年（一九三一）〜現在）を刀剣製作の継承者として桜井家の養子にする話も一時あったというほど、親密な信頼関係にあつたようである。結局養子話は戦争時の混乱もあつて頓挫したが、今も水野家で製作する包丁には、祖師である正次への敬愛の念を込めて、「正」の紋が刻されている。

註

- (1) 『熾仁親王行実』『熾仁親王日記』参照
- (2) 『威仁親王行実』参照
- (3) 横溝廣子「近代日本における金工家教育に関する一考察―帝室技芸員と東京美術学校を中心に―」（『茨城大学五浦美術文化研究所報 第十三号』一九九一年）参照
- (4) 堀井胤次『えにし 刀鍛冶百五十年の歴史』（一九九六年、私家版）参照。同書は細かな年代に検討の余地を残すが、大局的な経過を知りうる貴重な資料である。
- (5) 『威仁親王行実』参照
- (6) 村上忠男「有栖川宮舞子別邸と賀陽宮須磨別邸について」（『歴史と神戸』二〇一一年四月号）参照
- (7) 『威仁親王行実』参照
- (8) 『威仁親王行実』参照

- (9) 『京都府の近代和風建築 京都付近大和風建築総合調査報告書』(京都府教育委員会発行、二〇〇九年)「円福寺」の項参照。
- (10) 以上『威仁親王行実』参照
- (11) 当館酒井学芸員のご指示による。
- (12) 堀井胤次『えにし 刀鍛冶百五十年の歴史』(一九九六年、私家版) 参照
- (13) 月山貞一『日本刀に生きる』(一九七三年、刀剣春秋新聞社刊) 参照
- (14) 堀井胤次『えにし 刀鍛冶百五十年の歴史』(一九九六年、私家版) 参照
- (15) 相原清滋「桜井正次とその一族について」『刀剣美術一一七』(一九六六年、日本美術刀剣保存協会) 参照
- (16) 以下のように、日本各地で活動記録が残されているが、ここに記さない記録も多数あるものと推測される。年次については今後の検証も必要なものを含む可能性もあるが、典拠を含めメモとして記録しておく。
- ①明治三十九年十一月八日付の国民新聞の記事は「鎌倉の正正次」と題されており、堀井家の記録にも鎌倉瑞泉寺に桜井正次が設立した鍛錬所で鍛錬を行った記録がある。(堀井胤次『えにし 刀鍛冶百五十年の歴史』等)
- ②大正八年に安生慶三郎に招かれ静岡で鍛刀。(内山凡「日本現代刀小史(一)——現代刀匠の系譜と分類——」『刀剣美術』一四六号、一九六九年)
- (一)——現代刀匠の系譜と分類——『刀剣美術』一四六号、一九六九年
- なおこの安生慶三郎は、珙瑯事業で成功を納めた実業家で、大正四年に沼津の景勝地鮎壺の滝周辺に隠棲のための居を構え、その地に刀鍛冶を住まわせて鍛刀をさせていた。(『静岡新聞夕刊』二〇一四年九月八日付「安生慶三郎と長泉 逸話集め功績に光」)
- ③「昭和十(九)年現在日本刀匠調査」によると、桜井正次・正幸ともに「宗像郡宗像神社」が住所として掲載されている。(『栗原彦三郎昭秀全記録』(二〇〇〇年、栗原彦三郎伝記刊行会発行))
- 宗像での活動は「九州の炭鉱経営者の招きによる」。(内山凡「日本現代刀小史(一)——現代刀匠の系譜と分類——」『刀剣美術』一四六号、一九六九

年)

④没したのは静岡県沼津の「金剛道場」。(内山凡「日本現代刀小史(一)——現代刀匠の系譜と分類——」『刀剣美術』一四六号、一九六九年、ほか参照)

(17) 昭和十八年十月五日付の「森田正道刀匠 水野正範刀匠合作日本刀入魂」と題された漢詩、

如神殿裡 三尺龍泉  
冷光焰々 摧伏魔天

が『泥龍窟語録』(圓福寺発行)に所収される。

本稿の執筆に際し、八幡市・圓福寺様、堺市・水野鍛錬所様ほか、関係各位にご高配ご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

## Following in the footsteps of a swordsmith: Sakurai Masatsugu, a swordsmith who served the Arisugawa-no-miya Imperial Prince, and the Kansai region

Between 1888 from 1917, there was a villa of Prince Arisugawa Taruhito and Takehito Prince in the land of scenic spots, Maiko of western Kobe. However, Takehito Prince had a swordsmith is in where she, little is known that it has been provided the training facilities on site. In this paper, we and work in paying attention to the trend of about ten years Masatsugu Sakurai that was able to hold on Prince Arisugawa Takehito had been based in Kansai, discipline field that was built to where she "JOSHINNAN", then the hermitage is I will introduce work in Enpukuji of Kyoto Yawata City was relocated. In addition, given also that the child Masayuki of Masatsugu had being in the service of the Kyoto Ritsumeikan University of Japanese sword training office, to prospect the situation placed the sword maker in Showa prewar period from the end of Meiji year